

私たちの取り組み

北海道 札幌市立中央中学校



雪払い



特別な意識はなく、 みんなが自然とやっている

札幌市は人口およそ196万人。年間降雪量は約5m。これだけ雪の多い地域に、これほどの大都市が誕生したことは奇跡的にも感じます。

札幌市立中央中学校が「小さな親切」実行章を受章した理由の一つは、雪にまつわるものでした。札幌の子どもたちは、雪であってもあまり傘はさしません。日常的に雪が降り、冬の間はほとんどの時間が氷点下ですから溶けないということでもあるでしょう。当然ながら、通学に使うショルダーバッグの上には雪が山のように積もります。それを校舎に入る前に、お互いに振り落とし合うというのが、中央中学校のマナーなのです。

そしてもう一つが、「ドアリレー」です。これはドアを開けて出入りをするとき、次の人がいたら、そのままドアを押さえて開けておくという動作。これで親切の心もリレーされていきます。

生徒会会長の鈴木皓也君と副会長の梅田真衣さんは口を揃えて、「特別なことをしているという意識はないです。みんな自然とやっています」と話してくれました。

こうした行動が生徒たちに与える効果は大きいでしょう。雪を払い合ったり、ドアを押さえてもらったりしている中で、仲間意識や助け合いの意識が芽生えていきます。他の人の動きを観察する目も養われます。それは、「今日はちょっと元気がないな。何かあったのかな」といった気づきにもつながり、思いやりの心を育てていきます。そして、校内全体の雰囲気となっていくのです。鈴木君と梅田さんの元気な笑顔も、それを象徴しているように感じました。

同校ではこの他にも、市道に面した花壇の整備や冬の

背中
の
雪を落とし合い、
ドアを押さえ合いながら、
仲間意識と思いやりの
心を育む



ドアリレー

期間に路面に砂をまくなどの地域環境整備や、リングブル、ボトルキャップのリサイクル運動も行っています。



伝統になってしまえば、 「○○運動」という言葉はいらない

話を聞いていると、生徒たちから「伝統」という言葉が何度も出てきました。月に一回あいさつ運動も行っていますが、それが不要なほどあいさつが定着しています。「僕たちが入学する前からずっと続いてきた伝統ですから、ずっと守っていききたいと思います」と鈴木君。

また新津智哉先生は、「それが『中央中しぐさ』です」と説明してくれました。「中央中学校らしい行動」ということです。地域の人が生徒たちの行動を見ただけで、「あ、中央中の子だな」とわかってもらえるほどになっています。生徒たちにマナーなどを教えるとき、お仕着せではなかなかうまくいきません。自発的に行える環境づくりが大切になります。「小さな親切」運動本部が提供している「あいさつ運動」のたすきやのぼりも、そのための道具ですが、一度運動を始めたら、後はいかに継続するかにかかっています。

やがて中央中学校のように伝統になってしまえば、労力をかけずともマナーは身についていくのです。

中央中学校の様子を見ていて、お正月の空に高々と上がる凧を思い出しました。伝統という風に乗って、決して落ちてくることはないでしょう。



右から新津智哉先生、鈴木皓也君、梅田真衣さん